

令和 6 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：13802

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14186

研究課題名（和文）母親学級ベースの虐待予防プログラムの開発と効果検討ー愛着の世代間伝達に着目してー

研究課題名（英文）Development and Effectiveness of a Mother's Class-Based Abuse Prevention Program: Focusing on Intergenerational Transfer of Attachment

研究代表者

福元 優子（FUKUMOTO, YUKO）

浜松医科大学・医学部附属病院・臨床心理士

研究者番号：80869090

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：産後1ヵ月健診で同意を得られた産褥婦10名を対象に、自身の被養育体験と育児信念の関連を明らかにする目的で面接調査を行った。面接内容を質的帰納的に分析した結果【育児観・信念】【家庭環境】【家族関係】【自己感情と対応】【親との関係性】【大人との関り】の6つのカテゴリーが形成された。【育児信念】は被養育体験、被養育環境と複雑に関連しており、それらを母親が認知し養育することは、母親の心理的健康に貢献でき、主体的な育児参加や必要な支援につながるための重要なきっかけとなることが示唆された。今後得られた指標を加えて育児支援プログラムの作成と母親学級での実施を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「育児観・信念」は、母親自身の被養育体験が複雑に関連しているが、被養育体験を振り返り認知すること、自身の育児信念を認知することは他者の介入によって進む作業である可能性が考えられた。妊娠期にそうした場を設け、支持的に傾聴し、母親自身が抱える養育に対する困難さへの支援は、母親の心理的健康に貢献でき、主体的な育児参加、必要な支援につながるための重要なきっかけであると示唆された。周産期における母親支援の基礎資料として、活用できると考える。

研究成果の概要（英文）：We conducted interviews with 10 puerperal women who had consented at the one-month postpartum checkup with the aim of clarifying the relationship between their own experiences of child-rearing and their beliefs in child-rearing. As a result of qualitative and inductive analysis of the content of the interviews, six categories were formed: "Views and beliefs on childcare," "Family environment," "Family relationships," "Self-feelings and responses," "Relationships with parents," and "Relationships with adults." It was suggested that "child-rearing beliefs" are intricately related to the child-rearing experience and the child-rearing environment, and that mothers' recognition and nurturing of these beliefs can contribute to the psychological health of mothers and provide important triggers for independent participation in childcare and necessary support. In addition to the indicators obtained in the future, we aim to create a childcare support program and implement it in mothers' classes.

研究分野：周産期メンタルヘルス

キーワード：母親学級 虐待予防 妊娠期 育児支援プログラム 被養育体験

## 1. 研究開始当初の背景

2000年に児童虐待防止法が施行され、「貧困」「DV」「若年」「失業等の経済的問題」「望まない妊娠」など、こども虐待の顕在的リスク要因をもつ家庭(ハイリスク群)の早期発見・早期介入はされるようになった。一方で、虐待に関与する要因は、明確で顕在的なリスク要因の他に、「不安」「抑うつ」「他者との愛着形成」(Cooke, 2019)、自己効力感(Jahng, 2019)など複数の心理的要因が存在する。顕在的リスク因子がないが、周囲からは気づかれにくく本人の自覚もなされにくいこうした心理的要因による育児不安を抱えた母親は、潜在したまま放置され、養育困難や虐待が発生してからの対応となり、問題視されている(塚野、2015; 武田、2014)。虐待予防に関して、妊娠期からの育児困難や虐待予防を目的としたペアレンティングプログラムの評価から(伊達岡、2013)、ピアサポートによる育児不安の軽減等が示唆されているが、母親学級で具体的に虐待予防について介入した報告はみられない。また虐待の発生防止にはサポート資源の豊富さも重要である可能性が示されており、予防的介入の段階で必要なサポートと繋がることが望ましいとされている(木本ら、2007)。

親子間関係が次世代の親子関係に関連する世代間伝達は、過去の体験によって作られた表象がワーキングモデルとして作用する。そのため、幼少期の親との関係が現在の親との関係、現在の子供との関係に影響し、援助を考えるうえで、母親の過去の親との関係に着目する必要性を指摘されている(斎藤、1999)。母親自身の早期の被養育経験に由来する内的作業モデル(Internal Working Model: IWM)(対人関係における認知的な枠組み)が自身の子どもとの関わりに影響を及ぼし、子への愛着行動へと影響を及ぼす過程を愛着の世代間伝達という。愛着の世代間伝達とは、Bowlby(1969, 1973, 1980)のアタッチメント理論の中でも、IWM理論は母子間の関係性の問題について理解を深め、その関係性の問題を予防する援助法について示唆を与えるとされる(内田ら、2010)。IWMにおける愛着パターンには「安定型」「不安定型」「回避型」があり、不安定型のIWMを持つ母親は児童虐待を行いやすい(浦山、2009)、不安定・回避型の母親は子供に対して否定的な感情を持ちやすい(竹俣ら、2003)などの指摘がされている。また数井ら(2000)が行った成人愛着面接(AAI)から、「自律・安定型」の母親の子供は、そのほかの不安定型の母親の子供よりも愛着安定性が高いこと、相互作用や、情動制御において、ポジティブな傾向が高いことが示されている。IWMや母親の被養育体験の認知を変容することは、養育者としての発達を促す支援に繋がる可能性(武田、2014)や、産褥婦が被養育体験を理解し統合することは、養育方針の基盤を形成する重要な過程であることが指摘されている(南田ら、2008)。

そこで本研究では、母親の被養育体験とIWMを顕在化することによって、母親自身が養育に対する不安感や困難感に対する背景を理解・自覚し、他者と共有することで不安を軽減し、より早期に必要な支援へとつながりやすくなり、ひいては虐待予防へとつなげるねらいの育児支援プログラムを開発する。母親学級にグループセラピーの要素を取り入れることで、集団に対する高い費用対効果や集団における相互作用と自助作用を効果的に実現できる。こうした介入によって、早期に虐待の心理・予防的介入ができ、必要なサポート資源へとつながるよう支援するために、母親学級をベースに母親の愛着の世代間伝達に着目した虐待予防のための育児支援プログラムを開発することが重要であると考えた。

## 2. 研究の目的

母親の被養育体験と被養育体験に伴う内的作業モデルを顕在化すること、また顕在化された要因をもとに、母親自身が養育に対する不安感や困難感に対する背景を理解・自覚でき

る育児支援プログラムを開発することを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### 1) 研究対象

A 大学病院で出産し、産後 1 ヶ月健診で同意を得られた産褥婦 20 名を対象とした。

#### 2) 調査方法および調査内容

##### (1) 調査方法

面接調査法とした。

##### (2) 調査内容

基本的属性

基本的属性に関する内容は対象者からの同意を得た上でカルテ閲覧により得た。内容は年齢、同居家族構成、職歴、婚姻歴、出産回数、精神科受診歴、内科疾患、飲酒歴、喫煙歴、薬物使用歴、宗教の有無、夫からの DV、家族の病歴、本人及び夫が望んだ妊娠か否か、夫からのサポートの有無であった。

##### インタビュー内容

1 人 1 回、面接時間は 30 分～60 分程度インタビュー調査を実施、半構造的面接を行った。面接では「自身の育てられた体験について」「親との関係性」「親のイメージについて」「自身の母親像」「現在の育児について」「育児観・信念」「育てられ方が自身の育児にどのように影響していると考えているか」をもとに問いかけ、その時々の気持ち、考えについて自由に話して頂いた。面接場所はプライバシーを確保できる場所として、産後 1 か月健診で来院した際、外来個室にて行った。面接内容は対象者の同意を得た上で、IC レコーダーに録音した。録音した内容から逐語録を作成し、逐語録を分析対象とした。分析対象者は面接時間 30 分～60 分に該当する 10 名とし、得られたデータをグラウンデッド・セオリー法を用いて解析を行った。

#### 3) 分析方法

逐語録の内容を質的帰納的に分析を行った。対象者それぞれの逐語録から初期コードを作成し、全対象者のコードから意味内容の類似性に基づき、分類、集約し抽象度を上げて表現しサブカテゴリとした。サブカテゴリ同士を類似性に基づいて分類・集約しコアカテゴリが生成された。

#### 4) 倫理的配慮

本研究は浜松医科大学、人を対象とする生命科学・医学系研究における臨床研究倫理審査委員会の承認を得た後に実施した。対象者には、説明文書と口頭にて、研究の趣旨、研究協力の可否による不利益は一切ないこと、自由意志での参加、個人情報の保護、研究成果の公表について説明し、同意書に署名を得た。

### 4. 研究成果

#### 1) 被養育体験・育児に関する内容

産褥 1 か月の母親の養育にインタビュー内容として、56 の初期コードから以下の 6 つのカテゴリ【育児観・信念】【家庭環境】【家族関係】【自己感情と対応】【親との関係性】【大人との関わり】が形成された。

【育児観・信念】は親の育児方針やその変遷を表している。育児の経験を通じて得られる知見や反省点、体罰に対する意識、共同での育児の重要性、義理の親との育児観の違いなどが含まれた。育児方針が個人の経済状況や育った環境、親自身の育児経験によって大きく影響されることがわかった。また、母親の自己犠牲や親子関係が育児観に深く関わっており、親の価値観や信念が子供の育ち方に直接的な影響を及ぼすことが示唆された。

【家庭環境】は子供の発達や感情に大きな影響を与える要因であった。親の仲の良さや家庭全体の雰囲気、母親や父親との関係性が含まれた。父親の不在や不規則な勤務により、母親が主要な育児者となるケースもあり、母親への依存や対等な関係が育まれていた。親の性格や行動が子供に与える影響も重要な要素であった。家庭環境は子供の安心感や信頼感を形成し、子供が社会に対してどのような姿勢を取るかに大きく影響することが示唆される。

【家族関係】は家族構造や役割分担に関する要素を含んでいた。拡大家族や親の再婚など、家族の形態や構成員が変わることが子供に与える影響が重要である。親の役割分担が明確であることや甘やかされた育ち、自由な育ち方が家庭内の力学に影響を与える。父親の不在感や仕事の忙しさが家庭全体に及ぼす影響も含まれる。家族関係は、子供が家族内でどのように位置づけられ、どのような役割を担うかを決定し、それが子供の自己認識や社会的スキルの発達に影響を及ぼすことが示唆される。

【自己感情と対応】は、個人がどのように自分の感情を管理し、他者との関係でそれをどう

表現するかに関わっている。我慢の必要性や期待の諦めなど、感情の抑制や自己管理の重要性が含まれる。これらは家庭環境や家族関係からの影響を受けやすく、親の態度や行動が子供の感情形成に大きく影響すると考えられる。子供がどのように自己感情を処理し、どのようにストレスや困難に対応するかは、後の人生における精神的な健康や対人関係の質に影響することが考えられる。

【親との関係性】は、親からの支援や期待、厳しさと柔軟さ、親子関係の変遷など多岐にわたる要素を含んでいる。親との関係性が子供の発達に与える影響は大きく、親の行動や態度が子供の感情や行動に反映され则认为られる。親子関係が変わる中で、親からの支援や尊敬が育まれ、これにより、親との信頼関係が形成され、子供が自己肯定感を持ち、健全な発達を遂げることが可能となることが示唆される。

【大人との関わり】は、親以外の大人との交流が子供に与える影響を指す。地域の大人や学校の先生など、多くの大人と関わることで子供の社会性が育まれる。中学校での環境変化や影響も、子供の成長に大きな役割を果たす。これにより、子供が家庭外の社会に適応し、他者との関係を築くための重要なスキルを獲得すると示唆された。

## 2) 考察

### (1) コアカテゴリーの相互関連について

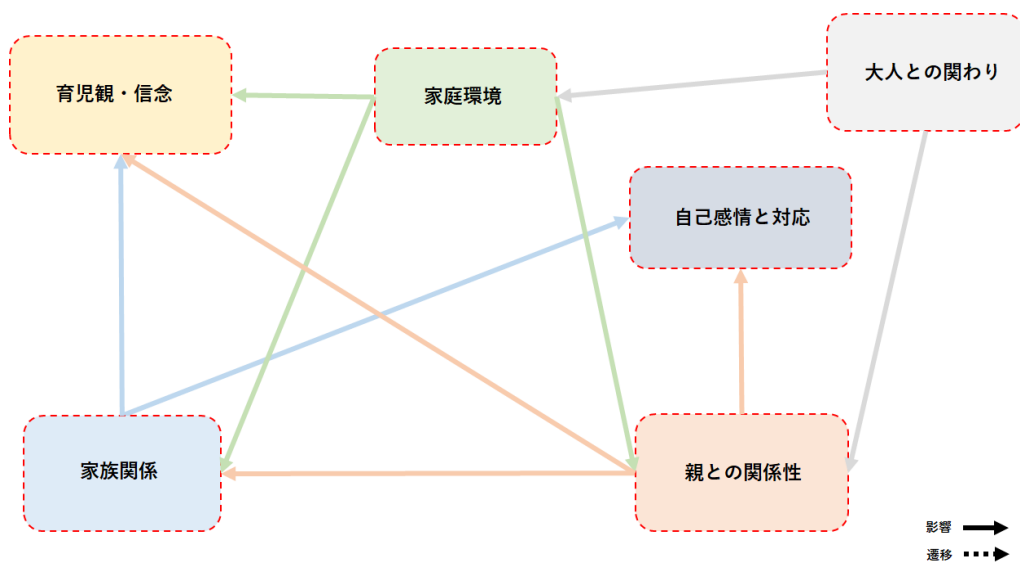
コアカテゴリーは個々の要素が互いに影響を及ぼし合うことで、子供の成長や発達に複雑な影響を与えることが考えられた。

【育児観・信念】と【家庭環境】においては親の育児観や信念は、家庭環境に大きく影響される。親がどのような家庭で育ち、どのような価値観を持っているかが、子供に対する育児方針に反映されることが示唆された。

【家庭環境】と【家族関係】においては、家庭環境が家族関係に影響を与える。親の仲の良さや家庭の雰囲気や家族全体の関係性を形成し、子供の感情や行動に影響を与えていた。

【家族関係】と【自己感情と対応】においては、家族関係は子供の自己感情や対応に大きな影響を与える。家族内での役割分担や親からの期待、支援が子供の感情形成に寄与することが考えられた。

【親との関係性】と【大人との関わり】においては親との関係性が、地域の大人や学校の先生との関係に影響を与えると親からの支援や期待が子供の社会的な関わり方に反映される。全体として、これらのコアカテゴリーは相互に関連し合い、複雑なネットワークを形成していた。親の育児観や家庭環境、家族関係、自己感情と対応、親との関係性、大人との関わりが子供の成長にどのように影響するかを理解することは、子供の健全な発達を促進するために重要であることが示唆された。



### (2) 母親自身の被養育体験の認知と自身の育児信念を認知することの重要性

産褥 1 か月の母親の養育に関する体験で語られた、「こう育てたい」「親としてこうありたい」という育児観・信念は、母親自身の被養育体験が複雑に関連しているが、被養育体験を振り返り認知すること、自身の育児信念を認知することは他者の介入無しでは進まない作業である可能性も考えられた。妊娠期にそうした場を設け、支持的に傾聴し、母親自身が抱える養育に対する困難さへの支援は、母親の心理的健康に貢献でき、主体的に育児参加すること、必要な支援につながれる重要なきっかけとなることが示唆された。今回育児支援プログラムの作成まで至らなかったが、今後得られたコアカテゴリーから妊娠中に実施できる育児支援プログラムを作成し、産後スムーズに育児が開始できるよう支援検討していく。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------